

保・幼，小の連携を充実させるための具体的な取組のあり方 —なめらかな接続をめざして—

芝井 豊明

保育所・幼稚園から小学校へ接続する際に，子どもの成長・発達に連続しているにもかかわらず，そこには何かしら「段差」のようなものがあるのではないかと，そして，保・幼，小の相互理解の不足がその「段差」を必要以上に大きくしているのではないかとされている。

本研究では，一方で，「接続期」の教育についての問題意識の歴史的経過を概観し，他方で，現場での観察や聴き取り調査等を行うことで，子どもたちの姿や意識をとらえようとしている。これらをもとに，相互理解や共通理解を深めるための留意点や手立て等，具体的な提案を試み，連携の充実と，保・幼，小のなめらかな接続を図ろうとするものである。

第1章 連携してめざすもの

第1節 「接続期」の教育についての問題意識の歴史的経過

幼児教育と小学校以降の教育との「接続期」について，幼児教育，小学校教育の双方がどのような問題意識をもって取り組もうとしてきたのであろうか。指導要領等をもとに概観してみると，双方が影響を受け合い，それぞれに「接続期」の教育に留意して取り組んできたようである。保・幼，小の連携の強化・改善が盛んに言われるようになると，徐々に，「接続期」の教育を共同，連携して進めて行こうとする取組が進められるようになってきた。

第2節 幼児教育と小学校教育とが共同，連携した「接続期」の取組

連携の充実をめざした取組の中から，

- ・岩手県教育委員会の指定を受けて取り組まれた「教育・保育に生かす幼・保・小共通ハンドブック」作り
- ・神戸大学発達科学部附属明石校園で取り組まれた「学びの一覧表」作り

を取り上げた。

これらの取組では，「ハンドブック」や「一覧表」といった成果物そのもののもつ意義も大きいですが，それらを生み出すプロセスにも大きな意義があった。プロセスと成果物とによって相互理解と共通理解を深め，連携がさらに進むのである。

第3節 「共通の言葉」

保・幼，小の双方がそれぞれ「接続期」の教育に留意し，影響を与え合っていた。さらに，「共通の言葉」をもって語り，連携の充実が図れる。

第2章 「接続期」の子どもたちの姿

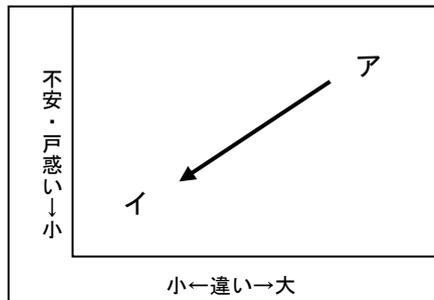
第1節 子どもたちへの聴き取り調査から

子どもの成長・発達は連続し，一貫したものであるにもかかわらず，保・幼，小間には必要以上の「段差」や相互理解の不足があるとされている。そこで，保・幼，小での観察や聴き取り調査によって「接続期」の子どもたちの姿を浮かび上がらせ，「接続期」における「段差」の要因や指導上の留意点等を考察することにした。

子どもたちは保・幼と小との「違い」や「不安・戸惑い」「楽しみ・期待感」をどう意識しているのだろうか。聴き取った子どもたちの発言を整理し，分析と考察を行ってみると，子どもたちが様々なものに「違い」を意識し，その「違い」が「不安・戸惑い」や「楽しみ・期待感」に結びついていることが分かる。図1の矢印(ア→イ)は，大きいと意識されている「違い」を小さくして行くことで「不安・戸惑い」も減少・緩和されるのではないかとことを表しているが，子どもによっては大きい「違い」に「楽しみ・期待感」を意識する場合もある。子どもによっては無理に「違い」を軽減・緩和しなくてもよい場合がある。

さらに，このような「違い」と「不安・戸惑い」「楽しみ・期待感」といった子どもたちの意識

図1 「違い」の大きさと「不安・戸惑い」

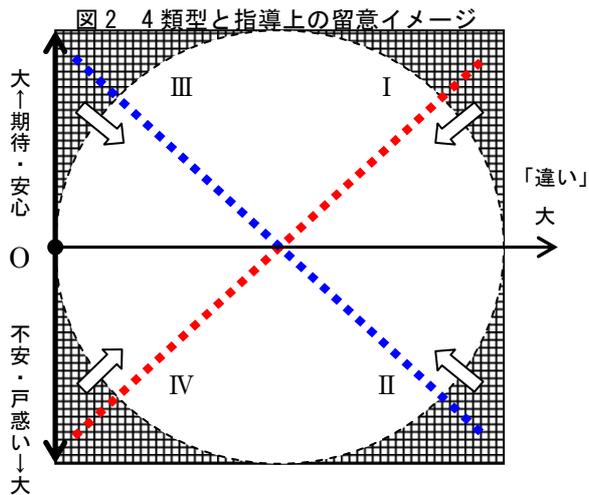


を大まかに整理してみると，「4類型」にまとめることができる。

この「4類型」は，子どもたちの

意識をもとに整理したものであるが，この意識は，例えば環境設定，子ども理解の不足等，指導者がもたらしたものであるとも言える。

図2は、「4類型」と指導上の留意についてのイメージを表したものである。



例えば、「違い」の大きさによって「不安・戸惑い」を大きく意識しているのではないかとと思われる子どもたちを「類型II」と表す。とりわけ網掛けで表した部分は、特に留意が必要ではないかとする領域である。それに対する留意や手立てを白抜き矢印で表している。保・幼、小間の「必要以上の段差」が問題になっているが、図2の網掛けの部分がそれを表している。

第2節 子どもの個別事例研究から

個人に焦点を当てた記録、分析、考察を行った。「段差」や「接続期」における指導上の留意点等について考察する資料である。

第3節 一人一人への対応

図2の白抜き矢印の向きが様々なのは一律な留意や手立てでは対応が難しいことを表す。

第3章 育ちや学びの相互理解と共通理解

第1節 相互理解や共通理解を深めるための情報とその共有に向けて

保・幼、小間で育ちや学びの相互理解や共通理解を深めるにはどのような情報を共有し、どのように伝達すればよいのであろうか。その一つとして、「育ちや学びの連携カード」作りを構想した。作成のプロセスと成果物とで相互理解や共通理解を深め、連携を進めようとするものである。共有すべき情報の内容として、とりわけ人とかかわりや社会性に焦点化されるべきではないかと考える。図3に提案する。

第2節 「育ちや学びの連携カード」

「育ちや学びの連携カード」の作成は概ね次のようなプロセスを踏んだ。

- ①「接続期」に見られる様々な子どもの育ちや学びの姿を短冊に書き上げる。
- ②短冊を整理し子どもの育ちや学びの姿をとらえる視点を設定し構造化する。
- ③②をもとに短冊の中から「知らせたい姿」「知りたい姿」等を選び、その程度や頻度などの目安となるものを設けて添える。
- ④③をレーダーチャート様の形式に配置する。
- ⑤その他、参考になる事柄について記述できる項目を設ける。

このプロセスにおいて相互理解や共通理解を深め、「共通の言葉」を手に入れ、さらには「育ちや学びの連携カード」そのものによって、情報の伝達や共有を進め、なめらかな接続を目指すきっかけや手立てにしようとするものである。

図3はその一部分である。

図3 「育ちや学びの連携カード」の一部

